

## 「2023年度インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学経済学部2年 濱中 佑菜

- ① 宗教(イスラム教)に対する考え方が変わった。プログラム参加前は、周りにイスラム教徒もおらずなんとなく他の宗教に比べて厳格なイメージがあり、滞在中も大きな注意を払わなければならないのだろうと思っていた。実際にインドネシア大の学生と関わってみると、ムスリムである前に同世代の学生なのだと強く思った。信教の違いがなにの障壁になることもなくインドネシア大の学生たちは仲が良いように見えたし、日本とインドネシアのマナーの違いについて発表しているカトリックの学生を見て「彼女はイスラム教徒ではないのにイスラム教由来のマナーについても説明しているすごい」と言っていたイスラム教の学生の考え方は美しいと思った。日曜日にジャカルタ観光に行った際はイスラム教徒の学生も私たちと一緒に教会に入っていたし、モスクでは半袖女性は腕まで隠れる被り物をしなければならなかったが、その姿をかわいいと言って撮影しているイスラム教学生に少し驚いた。これらを通して、自分が無宗教であるからこそむしろ宗教を区別しすぎていたことに反省した。宗教ごとに信条の根幹が違い、異なる文化が存在するのはもちろんであるが、その前に同じ人間であり、自分とは違ったり自分が分からなかったりするからといって身構えすぎるのは間違っていたと学んだ。また、私のグループはヲタ活についての発表をしたので、JKT48についての話になった際に「誰もヒジャブを被っていないけれどイスラム教徒はいないのか」と聞いたところ「難しい質問だけれど、クルアーンの違いを解釈しているか、守るかどうかは人それぞれだから単にクルアーンの部分を守っていないのかは分からない」という回答を得た。国民的アイドルがそのような立場であることは、私が見かけた一般的なインドネシアのムスリムの生活から考えると、論理的かどうかという観点からは不思議だが、その立場が許容されるところが、宗教を持つ人と言えど宗教をどの優先順位に置くかは人次第なのだ実感した。国の違いというより宗教の違いに関する学びであったが、日本においてはイスラム教徒ひいては宗教を持つ人と出会うことはあっても少数派なので、無宗教の自分が少数派である環境で、人々と宗教の距離感を肌で感じられたのは大きな学びになったし、世界の中で日本の宗教観が少数派であることを考えると国際理解への大きな一歩につながったといえる。派遣前に目標としていた通り、大きく視野を広げることと思考の引き出しを増やすことができた。将来的に国際的な仕事に就くかどうかはまだ分からないままであるが、やはり、たとえ国際的な仕事に就かなかったとしてもこの研修でひとつ先入観を取り払えた経験は、今後の人生の中で大きな財産となるだろう。思考の柔軟性を持ち続けたい。
- ② 渡航前から、ビザの手続きが想像以上に大変で勉強になった。ほぼデポックにしかいなかったのがインドネシア文化を広く学ぶことはあまりできなかったが、学生アパートで暮らして大学に通って夜はインドネシア大の学生が普段遊んでいるように遊んでというような、自分で旅行してもできない経験ができたのが良かった。具体的には、TMIという文化学習テーマパークでは先生や学生に解説してもらいながらまわれたり、プレゼン準備終わりにひとりで入っても注文方法が分からない地元のレストランに連れて行ってもらえたりした。植物、道路、建物など目に見えるものひとつひとつの在り方やまとう空気感が都会であっても日本とは違って、すべて興味深かった。
- ③ インドネシア語をインドネシア語で学ぶというのが最初は不安だらけだった。もちろんすべては聞き取れなかったが、意外と聞き取れないところがあっても授業にはついていけた。共同プレゼン発表はプレゼン内容よりも一緒に準備をする過程に意味があると思うので、お互いの文化を知ったり仲良くなったりする手段として非常に良かった。
- ④ プレゼンテーショングループのメンバーで、1番親しくなった方がインドネシア語・マレー語・英語・日本語とスペイン語と中国語も少し話すことができると言っていた。彼女は将来グローバルに活躍するのだろうと

<事務局使用欄> 受付番号：

-

思うと刺激を受けた。